

学 長 挨拶

札幌学院大学長 狩野 陽

札幌学院大学社会情報学部10周年記念の講演会に遠路、ご列席いただきありがとうございます。

札幌学院大学は1991年、それまでの商学部、法学部、人文学部に加えて経済学部と社会情報学部を創設しました。この社会情報学部は、社会情報学という名前を冠する日本で初めての学部となり、その後、その領域について社会情報学という名前のついた学部、学科が、とりわけ国立大学、あるいは私立大学へと相次いで開設され全国的に広まってまいりました。そこでは多様な専攻をもつ研究者が研究に従事するようになりました。

本学の社会情報学部の形成に尽くされた初代の学部長、田中一教授は、これらの社会情報学の研究者の集合体として形成された日本社会情報学会の初代の学会長になられた。このようにみまると、社会情報学が学問領域の中において市民権を持ち、ひとかどの役割を果たしているように聞こえますが、それは違います。社会情報学部は創設以来、この複雑で限定しにくく、しかも多様な学問領域の交錯する中で自らの研究の確立に悪戦苦闘を繰り返してきて、それは現在も続いております。

その中の一つの突破口として、学部創設の夏から社会と情報に関するシンポジウムを開催し、それが本年で第10回を迎え、今日はその特別講演として学生諸君あるいは市民の皆様幅広く公開をして、この10周年の一つの区切りを記念いたします。本日の主題は「宇宙・生命・脳の発生と進化」で、刺激的ではあるが少し脈絡のつかみにくい難しい主題となりました。企画をされた齊藤教授の考えでは、これは各ステップのシステムの発生と形成、進化にあるメカニズムを一貫して展望する希いがあります。その主題、しかもその学問領域の最先端である各先生のお仕事は、一見すれば私たちの常識に反しながら先端において火花を散らしていくわけですが、問題の根本はこれらの主題が現実のわれわれの生活と意識に貫入して現実をつくり上げている処にあります。ここに社会情報学のアクチュアルな問題が生じます。

今から220年ほど昔、もうちょっと昔の話になりますけれども、カントは長い沈黙の間において、認識批判の批判の書を公刊しました。それはいかにして先験的な総合的な判断は可能かということで、自然認識はいかに可能か、学問はいかに成り立ちうるかという、自然という秩序世界の認識の成立する条件を問いました。

そのときに、ご承知のようにモデルとして、その基礎づけをしたのは、数学と、ガリレイ、コペルニクス、そしてニュートンのいわば自然哲学、物理学でした。しかし、カントのこの書



狩野 陽 学長

は、その当時、ドイツ人にとってもひどく読みにくい論述でした。誰もが読んだとき、難渋して「これはドイツ語か」と言ったと当時の記事にあります。それを、その当時の人間が、学者のみならず、理解したかどうかはともかくとして、非常に高く迎え、評価をして受け容れました。これはきわめて不思議なことに見えます。

カントが生活をしてあまりその外には出なかった町はケーニヒスベルクで、ご覧のようにバルト海に臨む港町で、北側の国際的貿易港として盛んに活動していました。カントの周辺にはイギリスの貿易商人、あるいは北欧系の運送業者、そういう国際的な実業家がたくさんいました。カントの終生変わることのない親友は、その中の一人であるイギリス人でした。つまりこの町は商工業、産業の中心であり、交通の中心であり、コミュニケーションの中心でもあった。そしてその人たちがカントを受け容れて評価したことになります。ニュートン達が考えた場合、その当時の常識をはるかに超脱した領域でものを考えています。それからしばらく経ってからカントがその認識を基礎づけた、これらはともにその当時の学者であっても難解であったはずでした。しかるに難しい構文にもかかわらず、その何かが当時の市民達にはよく分かった。それが一体何であるかが一つの問題となります。

カントはこの書の中で、世界認識の構成を直観の形式として時間と空間、思考を形成する純粹悟性概念、つまりカテゴリー、そして構想力という、いわば認識の道具立てによる立論で認識の論理を構築した。これをカントは自然認識の基礎づけ、物理学、数学、自然科学が認識としていかに可能かを根拠づけたと思ったわけですが、おそらくこれを読んだ市民達にしてみますと、自分たちの世の中の分かり方が描き出されていることを感じ取ったが故に、実感として良くわかったのではなからうか。カントが描いたのは、宗教的ドグマや封建的序列から解放された市民生活と産業活動の現実認識の構成、つまり市民の経験のあり方の原型、市民社会の認識の仕組、分かり方の論理だったのではないだろうか。むしろ、かえって、それが投射されて自然認識の論理になったのではないか。これが今日の私の一つの、やや乱暴な推論であります。

そうだといたしますと、今日ここで私たちの常識、カントでは時間、空間とカテゴリーがある一定の約束として自然認識の基礎と考えられていましたが、おそらく今日の佐藤先生は、そういう日常の意識の時間と空間を一つ抜けた中で皆様がお考えいただかなければいけない次元でお話をお進めになるでしょう。それは大島先生、岩田先生にもおこる。それらが、皆様の理解として現実化する。それは科学の先端に働く鋭敏な認識の展開として、それ自体一つの社会認識の試みであり、それを聴き理解することを通じて、私達の知り方も問われる。先端をお歩きになる佐藤先生の論理自体が、私達の世界、生きていく世界の生き方の日常の論理と結びついています。そのように考えていきますと、これは一つの社会情報学の果たしうるある分野を指し示していくこととなります。これは領域を異にする認識の共生で、非常に広い形のシンポジウムとなります。

どうぞ自由な発言のもとで、お一人お一人が自分の認識が問われているというかわり、今日、現在の世界の第一線でお仕事をされているお三人の方のお話をお聴きいただきたい。それが社会情報学部のシンポジウムの趣意であり、大学としての、この講演会の希いでもあります。

これをもって、始まりのご挨拶といたします。有難うございました。